

第4章 中央製作所Ⅱ(宮野目) 第二代社長／佐々木郁夫

昭和41年～昭和60年



畠山由二氏

元社員 畠山由二氏、藤井千三氏

現社員 西塚保氏に聴く

～発展に次ぐ発展でした～

中央製作所は昭和40年に株式会社として法人化し、佐々木郁夫氏が専務取締役役に就任し、新たな経営が始まりました。その頃の様子とその後の発展を、当時社員でその後も長らく中央製作所に勤務された畠山由二さん、藤井千三さん、現社員の西塚保さんに伺いました。



中央製作所は昭和40年に株式会社になりました。組織変更した理由は何でしょうか。

やはり会社経営の近代化でしょうね。これからの会社はみんなで役割と責任を持ちながら発展させてゆく、そんな考え方からの組織変更だったと思います。その時社長の次女礼子さんの御主人佐々木郁夫さんは岩手大学工学部機械科出身で、東京で足立ベニヤの製造部長をやってらしたんですが、その後中央製作所の専務に就任されました。この佐々木専務が会社組織の法人化を進言し、高橋吉助社長の了承のもと現実化していったのではないのでしょうか。

そして工場を東宮野目に移転しました。当時の様子をお聞かせ願えませんか。

花巻市大通りにあった前工場は入口が狭く、材料や製品の運搬に何かと不便でした。そんなことからの移転だったと思います。移転先の東宮野目は田んぼ、そこを整地し工場を建てました。

花巻市大通りの事務所に出勤し、トラックで宮野目に行って働きました。クレーンなども大通りで作り、宮野目に運んで組み立てて作業したもんです。そのクレーンは今も現役で働いていますよ。



昭和42年 東宮野目に工場移設

当時は高度成長期、仕事内容はどんなものでしたか。

仕事はどんどん来ました。橋梁・鉄骨・タンク・鉄塔など各種鉄鋼構造物をはじめ、起重機・集塵機など産業機械からプラント設備工事・配管・ダクト工事など仕事の範囲が広がりました。それに水門工事もあり、水処理機械も作りました。やがて、ステンレス製品、アルミニウム製品も作るようになり、塗装も手掛けるようになりました。

昭和51年のこと、中国上海の宝山製鉄所を作ることになりました。私達は宮野目の工場で鉄骨を組み立て輸出しました。誇らしかったなあ。

昭和50年頃から国鉄の仕事が入ってきた。山田線、大船渡線の仕事もしました。なにしろ[㊦]の資格を持つ会社は私達のみ、しかも溶接技術を併せ持つ会社は東北地区には無かった。だから仕事がどんどん入ってきた。例えば、鉄橋の橋側歩道工事などはその代表で、なにしろ500トンもの蒸気機関車が走る振動に耐える工事、しかも絶えず列車が走る間の工事です。二人が工事し、その安全を確保のため前後に二人の見張りが付き、更に現場監督が付くという仕組みで、しかも山峡に材料をかついで運ぶという大変な仕事です。

さらに、会社は「納期は必ず守る」主義でしたから、私達は寝ないで働いて納期を守ったもんです。そんな仕事ぶりが認められ、今日のような会社になっていったのではないのでしょうか。「会社は社長が作るのではなく従業員が作るもの」とよく言われますが、本当にそうだと思います。

仕事が増えればそれに伴い技術も必要になったのではありませんか。

我々の世界は資格あってのなんぼのもの、資格の有無は生命線です。おっしゃるように当時は高度経済成長期、技術の向上は日常茶飯事、私達も技術習得に懸命になったもんです。みんな岩手県工業試験場に行って勉強しました。社長がそうすることを望んでいましたし、私達を快く送ってくれました。

ステンレスへの移行の時も、アルミニウムへの移行の時も同じ、講習は軽金属協会によって開催されますが、



昭和50年代に製作した小舟渡橋(花巻市)



小舟渡橋開通祝賀会での佐々木郁夫社長



中国上海宝山製鉄所鉄骨組み立て



藤井千三氏

当時会場は川崎市にしかありませんでした。私達はそこに出向いて資格を取りました。

講習は約1週間、費用は全額会社が負担してくれました。だから講習で不合格、資格なしでは帰れない、みんな必死で勉強しましたよ。鉄工所というと鋼のこととしか考えない時代、ステンレスやアルミニウムの仕事などはまったく新しいことで、新しい資格を取って新しい仕事をするのは誇らしく、自分の仕事を自慢したいほどでした。先見の明ある会社だったんです。嬉しいことです、やりがいがありました。



JIS半自動溶接技術証明書

仕事も増え人も増えれば安全管理も大変だったでしょうね。

当時は「怪我は手前持ち」というのが当たり前でね。でも怪我や事故はあまりなかったなあ。でも安全管理は大事なこと、特に岩崎安男さんがいらしてから「安全講習」が行われました。最初はなんでこんなことと思ったのですが、徐々に徐々にその意識は浸透し、互いに安全管理に気をつけるようになりました。会社が全国安全表彰を受けたのも技術習得とともに、この安全管理徹底の成果もあったと思います。



ステンレスタンクの製作

当時は労働環境も変わり労働組合の力も大きくなったと思います。その点はどうでしたか。

そのとおりです。私達の職場にも、その道の方々がオルグ活動に入り、昭和52年8月31日に結成大会が開催され、労働組合が誕生しました。スト権・団体交渉権など労働三権が確立され、労働環境の改善、賃金制度の改善、特別有給休暇制度、扶養手当の制度化、退職金制度等が次々と話し合われ、協定が結ばれていきました。さらに、労働時間の短縮、時間外労働、通勤手当、作業服の自己負担、公休日なども話し合われました。でも、スト騒ぎはありませんでした。労使協調路線を貫いたと思います。

最初はなんでも話し合わなければならなくて大変でしたが、会社も良く話を聞いてくれました。最初の半年間ほどは月に1・2回労使合同の勉強会も開きました。そんな



ステンレスタンクの据付現場

ことでお互い言いたいことを言えましたし、言ったことはやるという主義でしたので、お互いの信頼関係が生まれ、従業員が安心して働ける会社になっていったのではないかと思います。この話し合いの精神は今でも続いていると聞いています。

労使協調路線で思い出すことはありませんか。

労使協調とっていいかわかりませんが、その一つの例として花壇整備が挙げられます。国道4号線が4車線に拡大され会社の前に花壇のスペースが生まれたことから、会社で花壇づくりが始まったのです。当時、市は「花いっぱい運動」に取り組んでおりまして私達もそれに参加したのです。市から苗をいただき植え育てるのです。

花壇づくりと一言で言いますが、これは半端なものではありません。なにしろ130メートルもある花壇ですし、床づくり、苗植え・水やり・除草・追肥・花摘みなど毎日のように手入れが必要です。みんなでやりました。お盆などの休みにも会社に出てやりました。

お陰さまで、立派な花壇となり、旧建設省や国土交通省から何度も表彰されました。昭和40年頃から始めたこの花壇づくりは今も続いています。

このような社員一体となつての活動は、他には秋の花巻祭参加があります。みんなで神輿を担ぎ、街を練り歩きます。これもまた楽しみの一つです。今でこそ企業の社会貢献が叫ばれておりますが、私達はあの当時から始めていたんだと思います。

その他に社員が一体となつての活動にどんなものがありますか。

社員旅行でしょうね。北海道道南・道東を始め、四国金毘羅さん、長崎ハウステンボス、沖縄にも行きました。平成8年頃には韓国ソウル、香港にも行きました。費用は旅行積み立て、半分ぐらい会社から補助がありました。そんな訳で2年に1回ほどだった社員旅行を毎年行うようになりました。

宴会も楽しかったなあ。沖縄に行った時、ある社員の



現在も続けられている花壇整備



当時の花巻祭



野球チーム(平成2年5月31日)



西塚保氏



専務時代の佐々木郁夫(右から2人目)

お土産は旅館からいただいたパイナップルのみ。実はその社員持っていたお金全部飲んでしまっていたのです。そんな豪傑もありましたよ。

それに野球、みんなでやりました。昼休みはもとより、秋の獲り入れが終わると田んぼに出て練習、春は雪が解けるとまた田んぼに出る。これも楽しかった。その後、宮野目中学校グラウンドや北上鉄工所のグラウンドを借りて練習、対外試合も結構やりました。その結果でしょうか、実力もなかなかで職場対抗の大会にはA・B2チーム出場し、いい成績を上げたもんです。

しかし、昭和48年のオイルショックから鉄工業界は不況に入るではありませんか。

そうです。不況の時代に入りました。仕事が減り工場の半分は遊ばせる状態で、私達も仕事をゆっくりとやる。効率の悪いこと悪いこと、仕方なかった。

でも、賃金カットとか遅配は無かったし、解雇もなかった。新規採用を控えたり、会社はあの手この手と工夫を凝らしてくれたと思います。特に、ガソリンスタンドの営業利益で会社は救われたところもあったと聞いています。本当に大変な思いを致しました。

会社を法人化し発展させたり、労使協調路線を進めたり、社員の福利厚生を充実したり、不況を乗り越える工夫をされるなど大変だったと思います。どなたがお仕事の中心となって進められたのでしょうか。

当時専務の佐々木郁夫さんです。昭和50年には社長になられました。お人柄の良い方で、いつも我々と同じ作業服を着て、クレーンも操り、なんでも仕事をこなしました。背広姿はあまり見たことはありません。

こんなことがありました。三重県四日市で仕事を終えトラックに機械器具を積んで帰ろうとした時、当時の佐々木専務が「お前達は疲れている、トラックは俺が運転して帰るからお前達は新幹線で帰ってくれ」とのこと。その途中で専務は後ろから追突されることとなり、入院一か月。そんなお人でした。



北海道旅行 於昭和新山(昭和57年8月14日)



金比羅参拝(平成4年4月12日)



韓国旅行



会合へ出席する佐々木郁夫社長

それからこんなこともありました。ある社員が給料日に、給料全額を失くし途方にくれた時のこと。佐々木郁夫社長はどこから聞きつけたのか、その社員を呼んでこう言いました。

「お前、給料失くしたってな、お前はどうかなるだろうが、奥さんはどうにもなるまい。これをやるから奥さんにもっていきな。返さなくてもいいよ。」

封筒には5万円入っていたというのです。そんなお人柄の社長だったんです。

それじゃ会社の雰囲気は最高だったのでは？

そうですね、いい会社でした。なんとなく居心地のいい会社でした。郁夫社長のお人柄が職場に沁み込んでいたのでしょう。でも、やっぱり仕事がどんどん舞い込み忙しく、それに伴い新しい技術も身につけ、自分が成長していくことを実感できることが嬉しかった。やりがいのある会社だったということに尽きると思います。



パーティーで談笑する佐々木郁夫社長

会社がどんどん発展して行った様子や皆さんがとてもいい雰囲気でお仕事をなさっておられたことを知り、とても心温まる対談となりました。ありがとうございます。

元常務 岩崎安男氏、現中央石油常務 高橋安英氏に聴く

～時代の先をよむ経営～

昭和40年に株式会社化し、新たな歩みを始めた中央製作所は、高度経済成長の波に乗り発展します。昭和48年のオイルショックによる不況も乗り越え、昭和50年には佐々木郁夫氏が社長に就任、鉄構業、建築業、石油油脂販売業をそれぞれ分社化し、各社が懸命の努力を重ね、再び発展を見せます。この経緯について元中央製作所常務取締役岩崎安夫さん、現中央石油常務取締役高橋安英さん、現中央コーポレーション取締役伊藤誠さん、そして当時経理を担当していた佐々木郁夫夫人礼子さん（初代社長高橋吉助氏次女）に伺いました。



岩崎安男氏



中央石油 宮野目給油所

昭和40年代の会社はどのようなものでしたか。

みなさんご存じのように、時は高度経済成長期、鉄骨で店を建てる時代となり仕事が多く舞い込み忙しく、花巻市の上町商店街に中央製作所のクレーン2台、大型トラック2台が常駐することもしばしばで、体を動かせば動かすほど儲かった時代、会社は大きく成長しました。

専務の佐々木郁夫さんも当時30代で若く、背広姿になることはなく、作業服を着てがむしゃらに働かれました。何しろお人柄がよく、他人の話をよく聞き入れ、率先垂範の方でした。



高橋安英氏

東宮野目に宮野目給油所を開設されますね。

当時吉助社長や佐々木専務が時代の先を読んでいたんですよ「やがて車社会が来る」と。昭和47年11月頃から調査が始まりました。国道4号線、会社の前を通る車の調査です。上り下りどんな車が何台通るか、特にトラックは何台通るか調査したんです。今でいう市場調査です。そして給油所開設を決断した。

しかし、事はそう簡単にはうまく運ばなかった。既存の石油業界の反対に会いました。そんな中で粘り強い努力が続けられ、何とか開設に漕ぎ着けた。



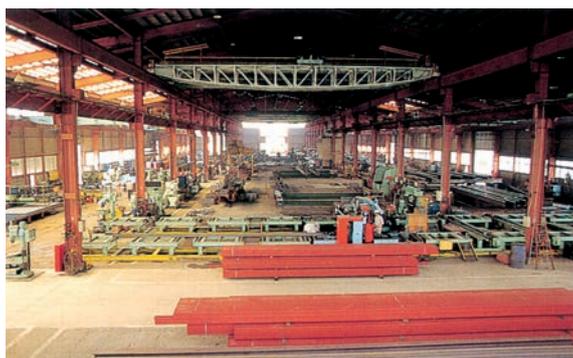
中央石油 花巻インター給油所



資源エネルギー庁長官表彰



資源エネルギー庁長官賞



工場内観

石油給油所は成功だったんですか。

大成功ですよ。その後、車社会の到来となりましたし、何より昭和 48 年の第一次オイルショックで日本中大変な騒ぎになりましたが、私達は石油給油所を開設していたお陰で燃料の心配は無用、大いに助けられました。先見の明とはこのことかと思いましたがね。その後、昭和 57 年には東北自動車道花巻インターチェンジの脇に中央石油花巻インター店を開設し、平成元年には資源エネルギー長官賞もいただきました。宮野目店開設当時反発された石油販売業界の方々も「お前達、よくやったな」と話してくれました。

オイルショック後、不況の時代に入りましたよね。

日本中に不況の波が襲いました。特に鉄工業の不況は大変なもの、大手企業の合併も続きましたし、県内でも北上や水沢の同業他社の倒産が続き、花巻の大手と言われていた企業も会社更生法の適用を受けるなど業界が大変混乱致しました。

私達も昭和 50 年に建築部門を(株)中央建設工業に、油脂販売部門を(株)中央石油に分離し、新たに(株)中央製作所との 3 社体制でスタート致しましたが、それは一つの部門の損失が他の部門に影響を及ぼさないよう各社が責任を持って経営にあたるための体制をつくる措置だったのです。そして佐々木郁夫専務が新たに 3 社の社長に就任されました。

どうやってこの不況を脱出していったのでしょうか。

今話したように、昭和 50 年に 3 社に分社化して独立採算制を取り、中央製作所も昭和 52 年に「建築工事業」を建設許可業に追加登録、さらに昭和 57 年には「塗装工事業」、「管工事業」を追加登録するなど、鉄構事業の周辺分野を拡大していきました。

また、溶接分野においても鉄の溶接のほかに、ステンレス溶接やアルミニウム溶接に加え、異種金属の溶接を研究し、技術的に難しい分野も開拓していきました。お陰さまで仕事の分野が徐々に広がっていきました。

このような私達の姿勢を当時労働省の施設であったポリテクセンター岩手が注目し、技術講習に呼んで下さった

こともしばしばでした。大変名誉なことだと思います。あの頃の頑張りを今でも思い起こします。よくやったものです。そして昭和62年以降、日本経済はバブルの時代に入り鉄工業界も好景気の時代を迎えるのです。

好不況の波に揉まれ、労働環境も変わっていったのでしょうかね。

昭和48年に大きな事故がありました。一人の工員が鉄の柵に挟まれるという事故です。また、ある時一人の工員が目にゴミが入って痛いというので眼科に行ったところ、ゴミではなく鉄の粉が入ったものでした。グラインダーの鉄の粉が入ったものです。「なぜ眼鏡を掛けさせないのか」と注意を受けました。

当時はいわば「仕事は盗んで覚えろ」主義、マスクをすることもなく、眼鏡を掛けることもなく、「怪我は手前持ち」という意識で、細やかな安全指導や安全管理の意識は低く「公傷制度」の認識もあまりありませんでした。

会社はこの事故を契機に安全管理、安全指導に取り組んでいくのです。

どのような安全管理指導を行ったのですか。

長らく取締役総務部長を務めていた岩崎安夫さんは前職で松尾鉱山に勤務していた時、社員にぎっくり腰が大変多く、ラジオ体操をすることによりそれが激減したという体験から、教育や安全指導を徹底すれば、ある程度怪我は防げるとわかっていました。そこでいわば中央製作所型を考え実践したのです。

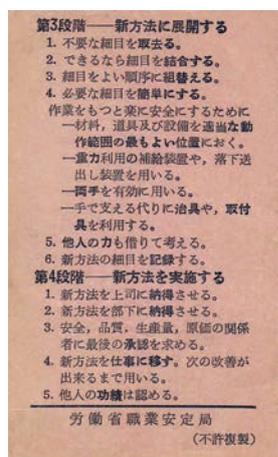
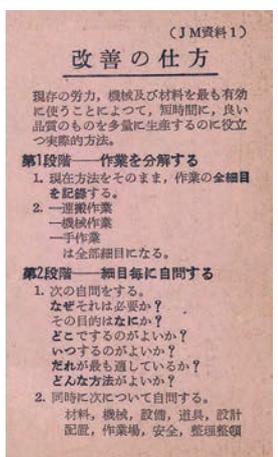
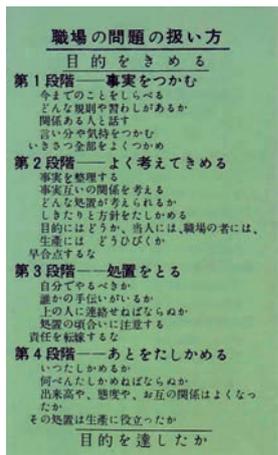
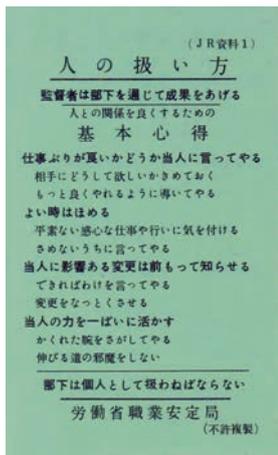
まず、災害分析と仕事に関する基本事項の徹底です。第一に仕事の内容と怪我などの災害状況の分析、第二に仕事のやり方・教え方、特に実践手順の徹底、第三に仕事の改善方法の共通理解です。このことをみんなで共通のものとするために、手のひらサイズのカードを作り係長以上に配布しました。「人の扱い方」「人の扱い方指導指針」「仕事の教え方～用意の仕方」「仕事の教え方4段階」「改善の仕方」などです（次ページ図参照）。

次に行ったことは、社員への安全意識の浸透です。事故



伊藤 誠





係長以上全員に配られた手のひらサイズカード

が発生する都度、「なにが原因で起こったのか」、「どうすればよいのか」をみんなで分析し、改善策を考え実践していきました。最初いぶかっていた社員も次第に積極的に参加するようになりました。

そして「安全講習会」を積極的に開催しました。事故事例やヒヤリハット事例を取り上げながら、全体としてやるべきことを明らかにし、会社全体で取り組んでいったのです。その中で「公傷制度」への理解を含め、制度適用も積極的に進めました。こうして、当社の安全管理は徐々に会社全体へ浸透していったのです。

安全管理の浸透はどんな効果をもたらしたのでしょうか。

まず第一に仕事が順序立てて行われるようになりました。全体見通しの中で、現場監督の指示のもと、秩序だてて仕事が行われるようになったのが第一です。

第二に、問題が起こった時の処理が迅速になりました。誰がなにをどうするかがはっきりしてきたからです。併せて組長・班長の責任体制も明確になりました。

第三は、仕事の改善が始まりました。一人の発見がみんなまで共有されるようになり、全体の成果に結びついて行ったのです。この効果は大きかった。こんなことからいつしか会社に視察者が増え、安全管理のモデルケースとされるようになり、県庁からも職員が見えるようになりました。

その当時、会社にはパソコンも導入されたと伺いましたが。

そうです、昭和56年に導入しました。あの当時パソコンはまだどの会社にも、銀行にも会計事務所にも入っていませんでした。ある日のこと、(株)ミロク情報サービスの盛岡営業所の方が会社を訪れ、パソコン本体を取り出し説明してくれました。一通り説明をお聞きして、「これは事務改善に役立つばかりではなく、会社経営の基礎固めになるのではないかと聞いたのです。

それから見よう見まねで勉強してみますと、システムの能力と可能性が理解でき、確かに会社経営の根幹をつくることができると解ったのです。社長にこのことを説明しパソコンの導入をお願いしましたところ「そうか、ひとつ



パソコンシステムを導入した佐々木礼子氏

やってみるか」ということになり、導入を決めたのです。
 (株)ミロク情報サービス盛岡営業所民間導入第1号と言われました。

最初は職員の給与計算事務から始めました。次に貸借対照表、資産管理と進み、会社の工事台帳も作りました。これによって工事の原価状況がいち早くわかるようになり、毎月開催していた業務委員会において、工事原価資料、月次決算資料も整うようになりました。依頼された工事が採算に合うのか、進捗中の工事の原価状況や改善点がはっきりとしてきました。やがて資料が積み重ねられ、会社経営の基礎資料となって行きました。と同時に、会社の経営管理がビックリするほど変わって行ったのです。

その後の推移を見ましても、今や会社経営はパソコン抜きには考えられないことです。今思えば、パソコンの導入をあの時やっていて本当によかったと思います。あの頃のデータベースが今も役立っています。会社の発展にいささかなりとも貢献できたのではないかと思うと嬉しくなります。それも佐々木郁夫社長がパソコンの将来を感じ取ってしてくれたおかげです。

激動に時代みなさんよく乗り越えられましたね。

私達も頑張ったけれど、やはり社長が偉かったのではないかな。佐々木郁夫社長は以前東京の足立ベニヤの製造部長だったのですが、高橋吉助前社長の次女礼子さんと結婚され、花巻に帰省のたび工場を見て回られ、後継ぎがないのはもったいないと話され、事情が許されるのなら私が後を継ぎたいと申し出られたと伺いました。

前にも話しましたが、佐々木郁夫社長は温厚篤実、他人の話をよく聞く人でした。自分の意見を言う前に他人の話を聞き、決断するとその仕事をその人に任せる人でした。しかも、私達と同じように作業服を着て現場で共に働かれる方だったのです。

そんな社長さんのお仕事ぶりをもう少しお聞かせ下さい。

私達の話をよく聞いてくれた佐々木郁夫社長は仕事も良くできる人でした。現場で仕事しながら機械の操作や仕事



パソコン導入当時の事務所風景



PCは現在事務所社員1人に1台



仙台泉ペDESTリアンデッキ(旧住友金属工業様向け)



の手順などいろいろなことを教わりました。仕事の現場は佐々木郁夫仕事塾と言ってよかったかもしれません。

会社経営ではこせこせせずに大きなものを狙うやり方で、しかもその裏では見えないことをしっかりと調べている人でした。やはり、佐々木郁夫社長あつての会社ではなかったかと思います。

そして、時々「俺、東京に行つて来る」と言つて一人列車に乗る人もあつたのです。当時、社長は東京で開催される「経営塾」のメンバーでしたし、また、新しい会社経営の考え方や技術の紹介などの研修会に出席される方でもありました。今思えば、社長は陰で自ら学んでいたんだと思います。いや、大した方ですよ、頭が下がります。

それぞれのお立場で会社の発展に尽くされました皆様のお話に本当に感銘いたしました。みなさんあつてこそその会社の発展とよくわかりました。それに佐々木郁夫社長さんのお人柄。そしてお仕事ぶり、まことに見事としか言いようがありません。お話本当にありがとうございました。



この人に聞く

基礎をしっかりと

佐々木郁夫氏

(株)中央製作所

戦後のドサクサのなかにまぎれ、自分の進みたい方向に進めないまま教師となり、その後東京での会社勤めを経て、現在に至つたという佐々木社長。前社長とともに会社を設立、五十年に社長に就任している。

「企業は存続していかなければならぬ。そのためには損失補てん、危険回避がぜひとも必要になる。それを可能にするためには、日ごろから最

大利潤を追求するのではなく、適性な利益を蓄えていき、基礎を固めていくのが筋」というのが持論。

その時々々の政策、景気に振り回されやすい業界の体質を知りつくしており、「加工度の高い、付加価値の高い製品に営業の主眼を置いてきた」成果が実り、「計画的な経営に近づいてきている」と会社の現状を分析している。

「性格的にこり性」という佐々木社長は、教員時代、会社員時代と現在ともその「負担」は同じだというのが、「企業はこれで良い」ということがないのが違い」と語る。そして、日曜、祝日もない毎日に「家族からみれば不満も多いはず。自分の時間は少ないが、子どもたちといっしょの家族だらんの時間は、できるだけ取るようにしているつもり」という。

鉄構いわて(昭和55年9月号)

前花巻地区鉄構工業会 会長 菊池章氏に聴く

～花巻鉄工業協同組合のこと～

花巻の鉄工業界も大同団結する時代を迎え、昭和49年に「花巻鉄工業協同組合」を結成し、初代理事長に当時株式会社中央製作所社長高橋吉助氏を迎えます。当時の鉄工業界の様子や「花巻鉄工業協同組合」の活動、その後の推移などを「花巻地区鉄構工業会」前会長の(株)菊池工業社長菊池章氏に伺いました。



前花巻地区鉄構工業会会長 菊池章氏

菊池様は高橋吉助氏とはどのようなご関係でしたか。

私は菊池工業を経営しておりましたので、鉄工業の同業者ということになります。でも、高橋吉助様は戦前から鉄工業を営んでおられましたから、私には大先輩も大先輩、後ろ姿から学んできたお方、この道の先達といってよろしい方だと思います。

とりわけ昭和49年に「花巻鉄工業協同組合」が結成され、中央製作所高橋吉助社長が初代理事長となり、会合で一緒にするようになってから親しくお付き合いをさせていただくようになり、多くのことを教えられました。



花巻鉄工業協同組合
初代理事長 高橋吉助

当時花巻には鉄工所はどれほどありましたか。

会社は10社位数えたでしょうか。もちろん、その第一は花巻鉄工所を前身とする中央製作所です。当時、各会社はそれぞれ得意なものを生産し、中央製作所は様々な機械部品を生産していました。除雪機や農機具を製造している現在の和同産業株式会社のような会社だったと思います。

当時の鉄工業界の経営はどのようなものでしたか。

どの業界も同じだとは思いますが、鉄工業業界も社会の好不況の波をもろに受ける業界です。戦中の軍需景気の時、戦後の物不足の時、高度経済成長の時、オイルショックの時、バブルの時など、それぞれの時代時代の動向に大きく左右されて来ました。

そんな中で、私は高橋吉助様の印象深く記憶している



花巻鉄工業協同組合
第五代理事長 佐々木郁夫

言葉があります。それは「俺は18回立ち上がった」という言葉です。なにせ18回は「七転八起」の倍以上ですからね。色々なご苦労がありながら不屈の闘志で歩んでこられたことを物語る言葉ではないでしょうか。

当時の仕事ぶりや労働環境を教えてくださいませんか。

私が働き始めた頃は、物資不足の時代で大変でした。材料もなく、よく今弘商店に材料探しに行ったもんです。給料は日給で月二回の支払いでした。時には遅配のこともありました。それでもなんとかあったもんです。いい時代だったんですよ。

そして昭和40年代の高度経済成長期、どんどんものを作る時代、建設業も大きく伸びていきました。朝明るくなれば働いて一日中休みなし。中央官庁も勤務態様について煩くなかった。給料を貰うと温泉に直行、お金がなくなると働きに来るといった猛者もいました。

そんな職人を使いこなすのですから経営者も大変です。そんな時期、高橋吉助氏が腕のいい技術者を揃えていたのは素晴らしいことだと感服します。

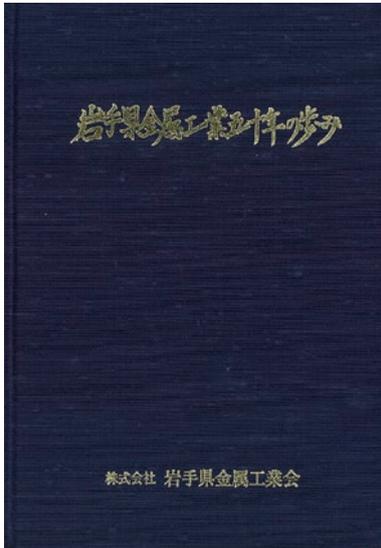
その後、オイルショックもあり不況の時代を迎え、更に鉄からステンレス・アルミニウムへと技術が進歩し、私達も時代の流れとともに歩んできました。

その様な時代の変化の中に花巻鉄工業協同組合は誕生したのですね。

花巻に鉄工所も増え、切磋商磨の中にも協調が必要となりましたし、時代の変化の中にその道の情報も必要でした。そんなことから同業者の親睦を深めるとともに、今後の発展のために情報交換を図るという趣旨で、昭和49年11月11日に法人格のある「花巻鉄工業協同組合」が結成され、毎月2回の例会が開催されました。その初代理事長に中央製作所社長高橋吉助氏が選出されました。翌年4月1日に第二代理事長は戸田鉄工所社長の戸田東助氏に引き継がれました。

現在も引き続き活動されているんですか。

平成2年に「花巻鉄工業協同組合」は発展的に解消し、任意団体である「花巻地区鉄構工業会」として再出発致し、



岩手県鉄工業50年の歩み 表紙



花巻鉄工業協同組合の記事

例会は四半期ごとに開催することとなりました。会員は花巻をはじめ大迫、石鳥谷、東和エリアの鉄工業を営んでいる事業所及びその原材料（資材）を供給している卸売業者となっております。

主な事業としては会員相互の親睦と業界の情報交換を行うとともに、会員及び役職員の親睦を目的に年1回の野球大会とボーリング大会を行っています。この大会はどちらも職場対抗で行っており、その時代時代を反映して大変な盛り上がりを見せます。

その後、理事長及び会長職は別表（下図参照）に見るように引き継がれ、活動は継続されております。昭和50年には高橋吉助氏の跡をお継ぎになられた㈱中央製作所社長佐々木郁夫氏が「花巻鉄工業協同組合」第五代理事長となり、平成25年には現在の㈱中央コーポレーション社長佐々木史昭氏が「花巻地区鉄構工業会」第二代会長に就任されております。

その後、特徴的な動きがありますか。

昭和49年7月には岩手県鉄構工業協同組合ができ、昭和52年には東北の組織が出来ました。こんな組織結成の流れを見て参りますと、花巻は鉄工業関係では先進地であったと言えます。事実、歴代理事長は県の理事を務め、本県の鉄工業界の発展に尽力して参りました。私も理事としてささやかながら任務を務めさせていただきました。

特に、佐々木郁夫氏は岩手県鉄構工業協同組合の理事を長らく務められ、情報出版委員長としてご活躍された後、平成10年には岩手県鉄構工業協同組合の第二代理事長に就任され、本県鉄工業界の発展に大きく貢献されました。

平成24年2月20日、108歳で永眠された高橋吉助氏の葬儀にあたり菊池章氏は弔辞を寄せられ、「花巻の鉄工業の発展は、ひとえに会長高橋吉助氏の新しい時代感覚で、後に続く者が力を発揮できる土壌を培って下さったからだと思います」と述べておられますが、菊池章様のお話からその内容をよく伺い知ることができました。本当にありがとうございました。

花巻鉄工業協同組合歴代理事長 （昭和49年11月～平成2年）

理事長	氏名	所属
初代	高橋 吉助	㈱中央製作所
第二代	戸田 東助	㈱戸田鉄工所
第三代	藤本 和男	㈱三協製作所
第四代	藤原 宥悦 ^{ゆう えつ}	㈱岩手ハウス工業
第五代	佐々木郁夫	㈱中央製作所
第六代	平賀 武	㈱ヒラガ
第七代	菊池 章	㈱菊池工業

花巻地区鉄構工業会歴代会長 （平成2年～現在）

会長	氏名	所属
初代	菊池 章	㈱菊池工業
第二代	佐々木史昭	㈱中央コーポレーション



花巻地区鉄構工業会
第二代会長 佐々木史昭